

# 子どもの音楽活動から読み取る 「音楽表現の原点」

## － 継続的音楽指導とアウトリーチ型音楽ワークショップの事例より －

渡辺 明子\*<sup>1</sup> 小畑 秀樹\*<sup>2</sup> 福地 友子\*<sup>3</sup>

### "Foundations of musical expressions" to read from children's musical activities: from the case of continuous musical instruction and outreach music workshop

WATANABE, Akiko, OBATA, Hideki and FUKUCHI, Tomoko

#### 要旨

本論文は、筆者らがやっている幼児への音楽活動の事例から、「音楽表現の原点」とは何かを追求するものである。継続的歌唱指導の事例と、音楽アウトリーチ活動の事例から見出したことは、「音楽表現の原点」とは、子どもたちの自発的な言動を引き出すことではないかということである。そのきっかけは、音との出会いであったり、歌唱であったりと様々であるが、人的環境と物的環境によって、子どもたちの自発的な言動が生み出されるのである。また、子どもの教育は、どの施設においても同様のものにしていくべきである。子どもの遊びは音楽表現の基礎を為すものでもあると考える。そのために保育者などは、子どもたちが音と出会い、音楽に触れることができる機会を確保し保障する立場にある。そして、子どもの自発的な音楽表現に繋がる援助は何かを見極めながら、関わる必要がある。

#### キーワード

音楽表現, 幼児音楽, 自発的, 保育者の援助

#### Abstract

In this paper, we pursue what is "the origin of musical expression" from the case of musical activity to the infant which the authors are doing. What we reached a conclusion from the case of continuing singing teaching and the case of music outreach activity is that "Foundations of musical expression" is to draw out the voluntary behavior of children. Although the chance is various, sounds and singing, children's spontaneous behavior is created by human environments and physical environment. Also, children's education should be similar equality for any facility. We think children's play is also the origin of music expression. To that end, child careers and others are in a position to secure opportunities and to be responsible for children to meet the sound and to touch the music. And it is necessary to be involved, while seeing what kind of aid leads to children's voluntary musical expression.

#### Key words

musical expression, infant music, voluntary, childcare aid

## 1. はじめに

2017年3月31日に「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」が改訂(定)告示された。3法令共通の改訂(定)のポイントとして無藤隆(2017)は、改訂(定)の趣旨はつぎの三つであると述べている。

- ① 3歳以上の子どもについての「幼児教育の共通化」
- ② 子ども・子育て支援新制度での「幼児教育の『質』の方向性」
- ③ 小学校から見たときの「幼児教育で育つ力の明確化」

①の「3歳以上、1日4時間」の幼児教育は、どの施設に通っ

ても共通に受けられる内容にすることとなる。つまり、2015年4月にスタートした「子ども・子育て新制度」による、「子どもの教育はどの施設でも同様のものにしていかなければならない」という方向性を引き継いで示している。各施設は、基本的な教育方針を明確化した上で、各園の特色を出すということと考えられる。

②の「質」については、幼児期に育みたい資質・能力の「3つの柱」と、幼児期の終わりまでに育ってほしい「10の姿」が設定され具体化されている。

③は幼児教育と小学校教育の接続の問題を取り上げている。

\* 1 : 聖徳大学児童学部児童学科・准教授／\* 2 : 聖徳大学短期大学部保育科・教授／\* 3 : 活水女子大学健康生活学部子ども学科・講師

幼児教育が施設によって他とかけ離れていると、小学校で集まった際に子どもたちへ同じ教育ができにくくなるという問題が生じる。この問題を解決するためには、幼児教育の共通化と明確化が必要になってくる。

幼児期には、遊びを中心とした園生活の中で人間形成の基礎を培い、続いて小学校では、教科を中心とした学習を行うという、いわゆる「幼小連携」は、現在でもその円滑な接続が課題となっている。無藤は、「今回の改訂(定)は、小学校・中学校・高等教育まで含めた大きな流れの上になりたっている」とも述べている。それは、幼小連携にとどまらず、高校までの一貫した学びへ、さらには大学・社会への繋がりも意識されているように思われる。

3法令の中で初めて「カリキュラム・マネジメント」という語句が使用されている。これは、それぞれの園において全職員が、目標をはじめ教育・指導の内容を理解し、共有できる明確なものをもつことが重要である、ということではないだろうか。3つの柱と10の姿を理解し、カリキュラム・マネジメントを明確にすることで、アウトカム(何を、どのように育むと、子どもたちにどのような育ちや効果がもたらされるか)がはっきりすると同時に、それを職員間で共有することができる。そしてそれは、小学校以降への繋がりを円滑にしていこう効果がある、ということではないだろうか。

教育要領の改訂は、教育の方向を変えたり、これまでの在り方を否定したりするものではなく、さらにこれまでの教育の在り方を深めるための方法を示しているのだと受け止めている。

## 2. 保育現場における音楽活動の現状

子どもと音楽の出会いについて秋田喜代美は、全国大学音楽教育学会における基調講演(2012)で、「大人の「音楽」という枠組みからの発想ではなく、子ども自身の音との出会い、音の創造としての機会から、遊びや暮らしの中の表現を見ていくことが求められるだろう。」と述べている。さらに、子どもたちの生活の中での音に関する経験(音との出会い)が大切であり、「そこに創発する経験カリキュラムとしての領域「表現」がある。」としている。しかし、子どもたちが生活の中での音に関する経験は、園のカリキュラム(教育・指導方針)によって大きな違いがある。そのため、子どもたちへの同様の教育の保障を、必ずしもしているとは言えないのが現状と思われる。

細田淳子(2017)は、領域「表現」に求められているのは、幼児期に体験した様々なことを心の中に蓄積していくことであり、心から湧き上がる感情を、素直に自信を持って表現できる場を確保することだと述べており、「それは、発表会のためなどの出来栄を重視する機会ではなく、過程が重視される日常生活の場でのことを意味する」としている。また、「普段の保育の中での具体的な事例が示されていないため、実践が繋がらないことが原因だと考えられる。」とも述べている。

保育現場においては、園によって活動の在り方は様々であり、その差は大きい。通常保育の中に、手あそびや歌唱が取り入れられていない園や、ピアノはホールにしかなく、各保育室に(電子)オルガンなどもない園が少なくない。

また、表現発表会(音楽発表会など)として、集団で決められたリズムを決められた楽器(多くの場合はタンバリン・鈴・カスタネットなど)で演奏することが定着してしまっている園も多い。また、鼓笛隊や合唱団を構成して活動している園もある。これらすべてを否定するつもりはないが、音楽活動としての出来栄が目標となってしまう、活動が保育者主導になりがちである。子どもたちは受動的な存在でしかなく、子どもたち自身が工夫して、活動を展開する主体性に基づく体験は十分に得られない。中川華那、片山美香(2015)も、「保育者支配型の技術指導中心の音楽活動や、保育者の苦手意識から音楽活動を回避しがちで結局何もしないなど、表現としての音楽活動のねらいが十分に達成されているとは言い難い。」と述べている。

一方で、園独自の特色をもって、音楽表現活動に力を入れているケースもある。例えば、わらべ歌あそびを取り入れたり、歌唱や合奏に関しては、外部講師に委託したりしている。最近の活動に取り入れ始められてきたのが、アウトリーチ活動である。アウトリーチ(Outreach)とは、英語で、「手を伸ばすこと、差し伸べること」という意味をもつ。林陸(2013)によると「元来は社会福祉の分野で一種の啓発活動、教育普及活動という意味で用いられ、現場へ出向いて活動するなど、—(中略)—音楽分野でのアウトリーチとは、音楽家や音楽団体・機関が、普段音楽に触れる機会の少ない人々に働きかけ、音楽を普及することである」としている。幼稚園や保育園などでは、演奏家を招き、音遊びや音楽を楽しむ時間を設ける音楽のアウトリーチ活動を取り入れているところもある。音楽家にゆだねることで、専門的な音や音楽に触れる体験ができる、という利点がある。

いずれにしても、「幼稚園でも保育所でも、認定こども園でも、子どもの教育は同様のものにしていかなければならない」という点から「差」が生じてしまうことは問題であろう。

## 3. 研究の目的

子どもにとっての音楽表現活動においては、それぞれの施設の特徴は生かされながら、どの施設においても同様のものにしていくことと、その内容が充実することが望ましい。そのためにはまず、子どもの音楽活動の原点は何かを追求することが必要と考える。音楽の様々な活動の中で、子どもの言動で共通する点をあげながら、子どもの音楽活動の原点を明確化していく。

## 4. 研究の方法

筆者の一人である福地が、長年にわたり外部講師として実施している継続的歌唱指導から、二種類(四事例)を取り上げる。

二種類とは、「替え歌～アクティブ・ラーニング」と「歌が子ども同士をつなぐ」である。また、同じく渡辺が音楽ワークショップ・リーダー（以下WSLと記す）として所属する東京文化会館（東京都台東区）が主催する、アウトリーチ活動から一つの事例を取り上げる。これらの、視点や取り組みの角度を変えた事例の中から、子どもの言動に着目し、共通する点を見出して、音楽表現の原点は何かを考察する。

## 5. 実践事例

### (1) 替え歌～アクティブ・ラーニング

**対象：**長崎市郊外にある「N保育園・3歳児クラス風組」男児9名、女児21名、計30名

**園の環境：**この保育園の保育目標は「『明日を拓く子ども』～たくましく、こころ豊かで、よく考える子ども～」である。保育園は新興住宅地の外れに位置しながらも、草花をはじめ昆虫に触れることができる、豊かな自然に恵まれた環境にある。また、雑木も生い茂る自然豊かな園内外には、山羊・羊・兎・チャボ・カモ・亀・金魚など様々な生き物たちが飼育されている。子どもたちは全員でその生き物たちを育て、日常的に触れ合うことで「命有るものとの共存」・「その命の大切さ・尊さ」も学んでいる。

**外部講師**（筆者福地＝通称「友ちゃん」）が留意している点：自然環境との関わりと音楽表現活動を結びつける遊びの展開を重点に考えて、歌唱指導を実施している。

#### 【事例1】散歩

N保育園では、朝の集まりの後の日課として、1時間程度、保育園周辺の散歩を実施している。自然溢れる地域であるため、子どもたちは季節に応じた草花をはじめ昆虫も身近な存在とし、触れ合うことができる。子どもたちは、そこで出会った自然現象（雨・雷）や動植物（かたつむり・犬・猫・蟹・カエル・チューリップ・ヒマワリ）などに反応し、それに因んだ歌を口ずさんでいる。

筆者の歌唱指導で歌った「おさんぽしたら」（作詞/作曲：中川ひろたか）の曲を使い、自然発生的に替え歌をうたうようになった。そして、全員で意見を出し合うと共に歌詞を整理しオリジナルの替え歌の創作へと繋がった。

「おさんぽしたら」（作詞/中川ひろたか）

#### オリジナルの歌詞

おさんぽしたら おめめキョロキョロ まちのあちこちみてみよう  
しかくいポスト こねこのひるね それともでんわこうじのおじさん  
おさんぽにでかけよう てとてをつなごう  
もしも ぞうに であったら みんなであくしゅ

#### 替え歌「おさんぽしたら」の歌詞（作詞/風組）

おさんぽしたら おめめキョロキョロ ほうくえんのあちこちみてみよう  
くろいくるま おおきいみかん それともだいこんのはっぱ  
おさんぽにでかけよう みんなでうたおう  
もしも りゅうに であったら みんなで もってこーい

N保育園では、生活発表会で既成のものは使わず、その時子どもたちが興味をもっている遊びを取り入れている。それは、生活延長上にある子どもたちの思いを表すためであり、園の方針である。

替え歌に登場する「りゅう」は、子どもたちの地元の「長崎おくんち祭り」に登場する龍である。「もってこーい」は、長崎おくんち祭り独特の言い方で、「アンコール」の意味である。

この事例では子どもたちを取り巻く環境（日課の散歩やお祭り）を素因として、歌（「おさんぽしたら」）を介し「りゅう」への創造力の拡がりを促す結果となった。

#### 【事例2】園庭での水遊び後の歌唱活動

夏になると園庭には仮設のプールとウォータースライダーが造られ、子どもたちは夏恒例の水遊びを体験できる場所となっている。

歌唱指導には、水遊びを題材にした「アニマルスイミング」（作詞/作曲 新沢としひこ）を取り入れた。子どもたちは筆者に向かい半円の隊形に椅子を配置し歌唱活動に取り組んだ。歌詞に登場する動物を他のものと置き換える際には、子どもたちからの提案を取り入れた。振り付けは身体全体を使い、その動物になり切り、歌唱活動に取り組んでいた。

#### (1) 「アニマルスイミング」（作詞/新沢としひこ）

##### オリジナルの歌詞

あついよあついよ こんなひは  
きつとゴリラもおよぎたい  
エッホホエッホ エッホッホ  
エッホホエッホ エッホッホ  
ゴリラおよぎで およぎたい

#### (2) 替え歌「アニマルスイミング」の歌詞（作詞/風組）

オリジナルの歌詞の下線部分について、子どもたちと共に考え下記のように言葉を変化させながら遊びを展開した。

・うさぎ→ ピョン ピョン  
・犬 → ワン ワン  
・猫 → ニャン ニャン  
・猿 → ウキッキ ウキッキ  
・風組さん→ スイ スイ スイ …など

この事例では、子どもたちの水遊びという共有体験によって、音楽による表現活動の楽しさを増幅させる結果となった。“ゴリラよりかわいい！”や“次は何にする？”などの会話が飛び出した。“新しい歌だね”と笑顔で筆者に語りかけてきた子どももいた。

これらの会話から、子どもたちの楽しむ様子は十分に伝わって来た。仲間同士で楽しさを共有して、替え歌をするという遊びに発展させていた。さらに、音楽を介した身体表現により、子どもたち、または子どもと筆者とのコミュニケーションをより深める状況も生み出している。

### 【事例3】歌唱活動の中での新たな状況と展開

【事例2】の活動において、時間が経過すると共に新たな局面を迎えた。それは、歌詞を子どもたちのクラス名「風組さん」に置き換えた際に起きた。水遊び直後の歌唱活動とあって、中央の空いたスペースまで泳ぐまねをしながら出てくる子どもが現れた。そして中央で歌唱指導をしている筆者に次々と抱きつき、スキンシップを求めてくる子どもの姿が見られた。状況はさらにエスカレートし、歌うことよりも中央のスペースに飛び込むことを競い合う子どもが増える事態となった。

通常では保育士の介入は全くないが、この時は、保育士から「少し座ろうか？」「友ちゃんのお話し聞こうか？」という言葉が掛けられた。

以下、担任の保育士より事態状況の聞き取りをしたものを記載する。

歌唱指導終了後、子どもたちの中から自発的に新たな状況が生まれてきた。それは、事態の収拾を図るための、子どもたち自身による自発的な話し合いになった。

A子「さっき友ちゃん(筆者)困ってたよね。(私たちは)歌の途中でピョンと行ってた(「飛び込んだ」の意味)よね」  
B子「友ちゃん(筆者)、困ってた、歌えなくなった」

このB子の発言をきっかけとして、子どもたちだけで話し合いが行われ、「友ちゃん(筆者)が困らず歌えるようにするにはどうしたらいいか？」「みんなが楽しく歌えるように？」などと意見が交わされ、その結果、次の事が取り決められた。

- ・ 歌っているときは、飛び込まない。
- ・ 椅子にお尻をつけ座っておく。(立ち上がらない)
- ・ 友ちゃん(筆者)が帰る際にはひとりずつタッチとギュッ(抱きしめる)する。

この話し合いを機に、様々な状況に応じ、子どもたち同士が話し合い、さらには注意し合う姿が見受けられるようになった。

この日の歌唱指導後、筆者は園長と意見交換を行った。園長からは、「子どもたちから表出されるものを大切にしたい。全部を受け止める、というわけではないが、とりあえず、(この日は)このままを受け止めて見守りたい。」とのことであった。

子どもたちは、知り得た歌を、自分たちの共通体験から「替え歌」に発展させて歌うことや、身体表現で楽しむ遊びに変化させている。相手の意見を聴いたり、自分のアイデアを提案したりしながら仲間同士で歌詞を考える姿から、お互いを意識しながら認め合っていることが読み取れる。さらに、自分たちに起きた「問題」に対して、話し合いを行っている。コミュニケーション能力が身につく、自然発生的なアクティブ・ラーニングを行っていた事例である。

### (2)歌が子ども同士をつなぐ

外部講師が指導している時にのみ、指導の効果が発揮されるのではなく、指導していない時間にも、その指導の効果が出るという事例を挙げる。

### 【事例4】歌唱活動の波及効果

川遊びの始まる6月頃になると、3歳児以上のクラスから聞こえる歌がある。

保育者が、子どもたちへの音楽を介した表現活動の中で取り入れた歌「がしゃごしょざわざわ」(絵本「あんぱるぬゆんた」文/代田昇より 作曲/丸山亜季)である。旋律は単純で、歌詞は14種類の蟹の名前の羅列である。

当初は年長児クラスで歌われていたものが、次第に他の年齢児にも広がっていった。年長児は繰り返し歌い、年少児はその聞こえてくる歌に興味を持ち、年長児に教えて貰っていた。また子どもたちは、保育士が作った14種類の蟹のペープサートを手にして、遊ぶことによって難しい歌詞を覚えることができていた。

そこには、一緒に歌うことと共に、教え合う楽しさも存在し、さらに歌詞の中に織り込まれている生物(蟹)への関心・興味をもつなど、様々な拡がりを生み出している。

### 参考

「がしゃごしょざわざわ」(絵本「あんぱるぬゆんた」(代田昇／文)より)

おかがに はまがに いとひきがに  
のこぎりがざみに たいわんがざみ

おきなわあなじゃこ あしはらがに  
 そでがらっぱに みはりがに  
 ぜんそくがに もくずがに  
 けぶかおおきがに いぼいわおおきがに  
 しゃみせんかかえて しおまねき  
 がしゃごしょざわざわ がしゃごしょざわざわ  
 あつまった あつまった

難しい歌詞ではあるが、一旦覚えてしまうと唱歌のように口ずさんでいた。子どもたちは肩を組み、顔を見合わせてうたっていた。このことから、覚えられたことの嬉しさと、仲間と一緒に歌うことの喜びが伝わってきた。子どもたちは、一体感を味わう体験ができたのだと思われる。保育士が作成したペープサートによる支援は、子どもたちが歌を覚えやすくするための効果があった。

歌を通じて身近に触れることが出来る蟹には、実は様々な種類が存在することに対する驚きを通じ、子どもたちの豊かな表現力を育むことに繋がっている。また、自発的に歌を教え合うことを通じ年齢を超えた一体感をもたらすと共に、新たな人との関わりを促す貴重な体験へと発展した。

### (3)音楽ワークショップのアウトリーチ活動

**日時・場所：**2017年1月31日 東京都内文京区立A幼稚園ホール

**実施者：**東京文化会館音楽ワークショップ・リーダー（WSL）2名(筆者渡辺, 他1名)

**対象者：**5歳児クラス(31名)

**タイトル：**「森の王様のフェスタ」

**物語の内容：**城に呼ばれた村人(幼児たち)と家来(WSL)が、気弱な王様(WSL)に協力して、姫と結婚式を挙げることが出来るように、フェスタ(結婚式のお祭り)を企画し練習するという内容である。

#### 【事例5】

- ① WSL(王様・家来)の自己紹介
- ② 子どもたちに名前を尋ねる→WSLが音楽に合わせて、子ども一人ひとりに名前を尋ねる。その後、クラス全員でその子どもの名前を呼ぶ。
- ③ 花飾りを作る(スカーフでの表現遊び)→色とりどりのスカーフを配る。子どもは思い思いにその感触を楽しみ、遊ぶ。そのうち、面白い動きをする子どもが出てきたため、WSLはその子どもの動きを真似るよう促す。
- ④ 楽器遊び→打楽器(マラカス、サウンドシェイプス、タンバリン、ギャザリングドラム、チベタンベル、

バラバラ木琴など)を配る。子どもたちは暫く思い思いに音を出して楽しんでいる。その間に二人のマラカスを持った女兒がリズム打ちを始める。暫くすると二人の息が合うようになりリズムが揃い、それが嬉しいのか、声を出して楽しそうに繰り返しマラカスを振っている。

- ⑤ 影絵(音楽鑑賞・クールダウン)
- ⑥ 舞踏ダンス(音楽に合わせて体を動かす)
- ⑦ 別れの挨拶→「さようなら」と言い、WSLが会場から去る時に、一人の男児が「僕も王様になりたい!!」と叫んで見送る。

②：子どもたちがWSLに自分の名前を伝えるのは一人ずつのため、順番を待つ間の緊張感と期待感がある。初めて会ったWSLに対して、自分の名前を伝えることができた満足感が十分に伝わってきた。子どもたちはWSLに名前を呼ばれることが嬉しかったようである。また、その後、クラス全員が声を揃えて自分の名前を呼んでくれることも嬉しかったようである。名前を呼ぶリズムやタイミングは、数人の子どもたちの名前を呼んでいくうちに、そのリズムの仕組みを理解する子どもたちが増えていき、クラス全体に浸透していった。子どもが、WSLである筆者を見つめて、声を合わせようとする光景から、クラス全員でタイミングを合わせようと一体感を味わっている様子が窺い知れた。

③：子どもたちは、スカーフを持って様々な動きをすることを通して、動きを発想する楽しさや展開の面白さを味わっている。このような体験を重ねることにより、さらに新しい動きが生まれ発想力の柔軟性に繋がると思われる。

④：女兒二人は、自分たちが生み出したリズムに合わせて身体も動かし始める。声を出して笑い楽しんでいる。WSLは、その二人のリズムを全員でやってみようと呼びかけを促す。全員でリズムを共有し、楽しんでいる状況を、女兒二人は楽しんでいる。

⑦：ワークショップのすべてが終わり、WSLが会場を去る時に掛けた言葉である。

## 6. 事例からの考察

事例ごとに子どもたちの成長や学びを考察していく。

【事例1】および【事例2】では、歌唱指導で覚えた歌を、生活の中の活動において替え歌という遊びへ発展していった。散歩でも水遊びでも、いずれの場合も子どもたちから自然発生的に出てきた行為であった。言葉遊びから身体遊びへさらに発展し、子どもたちは歌詞に出てくる動物の動きを自分たちで自主的に考え、動物になりきって中央の空いたスペースに飛び込んだ。

これらの活動は、仲間とのコミュニケーションや、人との関わりを深めるきっかけともなった。また、音楽を通じた表現活

動は、充実感や満足感を生み出す媒体であると同時に、活動を発展させる手助けとなっている。

【事例3】は、【事例2】で遊びが発展した後、その「遊び方」について子どもたちが自発的に反省・振り返り・話し合いをした例であり、これはアクティブ・ラーニングである。

保育者は、子どもたちが何を感じ、どのようにイメージして表現しているのかを理解することが大切である。保育者は、子どもたちの言葉や表情、身体表現などに込められた思い(非認知能力)を感じ取ることも大切である。子どもたちの表現力を高めるためには、保育者の関わり方が重要である。

【事例4】では、一つの歌が、年齢を超えて波及していく様子が見られた。

子どもにとって新しい歌との出会いは、その後の活動・成長に大きく影響する。歌詞の意味や発音が難しい歌を、唱歌のように自発的に口ずさみ、自然に覚えている。保育者の間接的な援助(この場合はパープサートであった)を受けながらも、覚えることができた。それを聞いて年少児が自然に興味を持った。興味を持った年下の仲間に、年長児は自発的にこの歌を教え始めた。自然に拡がりを見せた事例である。

音楽を介した表現活動は、仲間と一緒に取り組む喜びや楽しさをもたらし、充実感や達成感を獲得できる有用な手立てであることを裏付けている。

【事例5】はアウトリーチ時の事例である。アウトリーチ活動で筆者らが大切にしていることは、非日常の空間に子どもたちを招き入れることである。そこには、ストーリー性があり、サプライズがある。この事例の場合は、いつもの園のホールが城になり、王様たちが待っていたことでストーリーが始まる。自分を含めたクラスの仲間は村人であることを認識し、ストーリーに入り込む。自然な形で、頼りない王様を応援することになりスカーフを振ったり、楽器で合奏したりした。その動きの中に子どもたち独自の発想が見られ、自発的にリズムを打った。ストーリーの最後には「王様になりたい!」と自然な思いとしての発言があった。

自分たちの生活の場である園のホールであるため、安心してつづ、仲間と期待感を味わった。歌をうたったり、珍しい楽器に触れたりする体験もできた。子どもたちは、非日常の空間で、いつもとは違う仲間の様子を見る機会となった。また保育者は、子どもたちの新たな一面を見ることができた機会になった。

これら五つの事例に共通していることは、「子どもの自発的行動」や「子どもの自然発生による行為」である。つまり、音に出会える環境づくりや、保育者などの援助や見守りなどの関りによって、子どもたちの自発的な行動が生み出されているのである。

## 7. 「音楽表現の原点」を考える

五つの事例全てにおいて、音楽活動を実施したのはどの事例

においても、音楽の専門家であったことが、本研究の他にはない特徴である。それらの事例から共通点を見出すことで「音楽表現の原点」とは何かを探ってきた。そしてそれは、子どもたちの自発的な言動を引き出すことではないかと考えるに至った。きっかけは、音との出会いであったり、歌唱であったりと様々であるが、そこに保育者や外部講師などの人的環境と、歌唱教材や「音が出るもの(楽器を含む)」の物的環境によって、子どもたちの自発的な言動が生み出される。このことから、保育者などの子どもたちへの関りが重要であることは明白である。

以下音楽表現の原点となるポイントをまとめる。

- 子どもたちの表現活動に対しては、肯定的な受け止め方が、その後の子どもたちの積極的な自己表現に繋がる。
- 子どもたちの自己表現を豊かにすることを意識した援助の実践に、努めることが必要である。
- 子どもたちにまず経験させ、それから次への対応を考えるという、見守りと一歩先を考慮した援助を行うべきである。
- 音楽活動を行う際、子どもたちを主軸に置いた上で、子どもたちが意欲的に取り組める環境を整えていくことが必要である。

これらが、子どもたちの総合的な育ちに繋がると考えられる。

この「音楽表現の原点」は、細田が述べている「心から湧き上がる感情を、素直に自信を持って表現できる場を確保すること」に他ならないと考える。同じく細田は、「表現できる場」について「過程が重視される日常生活の場でのことを意味する」とも述べている。今回の事例では「日常生活の場」に筆者らが関わることで、幅広い歌唱活動が取り入れられたり、日常生活の場における「日常的な音」だけでなく、「非日常的な空間」における「非日常的な音」との出会いも生じたりしている。細田が「実践が繋がらない」原因として挙げている「普段の保育の中での具体的な事例が示されていない」に対する一つの示唆になることを願っている。

## 8. おわりに

子どもの教育は、それぞれの施設の特徴を生かすとともに、どの施設においても同様のものにしていくことが望ましい。また、子どもの遊びは音楽表現の原点でもあると考える。そのために保育者などは、子どもたちが音と出会い、音楽に触れることができる機会を確保し保障する立場にある。そして、子どもの自発的な音楽表現に繋がる援助は何かを見極めながら、関わる必要がある。

## 引用文献・参考文献

- 無藤隆. (2017). 3 法令改訂(定)の要点とこれからの保育.  
チャイルド本社, 22.
- 秋田喜代美. (2012). 基調講演「豊かな表現の育ちに向けて：音を楽しむ経験としての音楽と表現」. 全国大学音楽教育学会研究紀要, 23, 12.
- 細田淳子. (2017). イメージを広げる楽器遊び. 全国大学音楽教育学会研究紀要, 28, 2-3.
- 中川華那, 片山美香. (2015). 音楽による幼児の表現活動の意義と保育者の援助に関する研究 ―人とかかわる力を育むために―. 岡山大学教師教育開発センター紀要, 5, 72.
- 林睦. (2013). 音楽教育におけるアウトリーチを考える ―基本的な考え方, 歴史的経緯, 最近の動向―. 日本音楽教育学会音楽教育実践ジャーナル, 10, 2, 6.

## 参考資料(楽譜)

## おさんぽしたら

中川ひろたか 作詞・作曲

おさんぽしたら おめめ キョロ キョロ まちの あちこち みて  
おさんぽしたら みみを すまして まちじゅうのおときい

みようしかくいポスト こねこのひるね それともでんわ こうじて  
みようじてんしゃのベル とりのなきごえ それともみつばちのは

の おじさん おさんぽに でかけよう てとてをつ  
ねのおと おさんぽに でかけよう うたをうた

なごうもしもぞうにであつたら みんなであくしゅ  
いながらもしもでんしゃにであつたら みんなでバイバイ

## アニマルスイミング

新沢としひこ 作詞・作曲



あ つ い よー あ つ い よー こ ん な ひ は きーっ とー

ゴ リ ラ もー お よ ぎ た い エッ ホ ホ エッ ホ エッ ホッ ホ

エッ ホ ホ エッ ホ エッ ホッ ホ ゴ リ ラ お よ ぎ で お よ ぎ た いー

## がしゃごしょざわざわ

絵本「あんぱるぬゆんた」(代田昇/文)より  
丸山亜季 作曲



お か が に は ま が に い と ひ き が に の こ ぎ り が ざ み に た い わ ん が ざ み

お き な わ あ な じゃ こ あ し は ら が に そ で が ら っ ぽ に

み は り が に ぜん そ く が に も く ず が に け ぶ か お う ぎ が に

い ぼ い わ お う ぎ が に しゃ み せん か か え て し お ま ね き

が しゃ ご し ょ ざ わ ざ わ が しゃ ご し ょ ざ わ ざ わ あ つ ま っ た あ つ ま っ た